

2016 年度

金城学院大学自己点検・評価報告書

金城学院大学 自己評価委員会

目次

金城学院大学自己点検・評価報告書について	・・・ p.2
2016年度 活動報告	
学長室	・・・ p.3
大学FD委員会	・・・ p.4
大学教務委員会	・・・ p.5
大学入試委員会	・・・ p.7
大学学生生活委員会	・・・ p.8
図書館委員会	・・・ p.10
キリスト教センター委員会	・・・ p.12
国際交流センター委員会	・・・ p.14
マルチメディアセンター委員会	・・・ p.16
言語センター委員会	・・・ p.18
文学部自己評価委員会	・・・ p.20
生活環境学部自己評価委員会	・・・ p.21
国際情報学部自己評価委員会	・・・ p.23
人間科学部自己評価委員会	・・・ p.24
薬学部自己評価委員会	・・・ p.26
文学研究科自己評価委員会	・・・ p.28
人間生活学研究科自己評価委員会	・・・ p.30

金城学院大学自己点検・評価報告書について

金城学院大学

学長 奥村 隆平

金城学院大学では、教育研究の質の向上と社会的責務を果たしていくために金城学院大学自己評価委員会を中心として毎年自己点検・評価を実施しています。

これまでは、認証評価機関による評価を受けた際の自己点検・評価及び認証評価機関による大学評価結果をまとめた「WINDOWS」を発行し、公表してまいりましたが、2015年度より、毎年行っている自己点検・評価活動をまとめた「自己点検・評価報告書」についても公表することにいたしました。

この「自己点検・評価報告書」は、各委員会や各部署における活動報告と評価コメントで構成されています。

大学自己評価委員会では、毎年3月に各委員会等で策定された次年度「活動目標」(Plan)について審議をします。この活動目標に基づき各委員会等で1年間活動を行い(Do)、その結果を2月に「活動報告」としてまとめます。その後、学内評価者による評価・検証と自己評価委員会での審議を経て(Check)、次年度の活動につなげていく(Action)というシステムをとっています。

本学では、大学自己評価委員会を中心にPDCAサイクルを十分に機能させることにより、教育に関する内部質保証を確立することを目指しています。

2016年度 活 動 報 告

所 属	学長室	職 名	学長	氏 名	奥 村 隆 平
<p>【2016年度活動目標】</p> <p>(1) 教職員への建学の精神の周知</p> <p>(2) 新W3棟及びセンターコートの有効活用</p> <p>(3) 「大学コンソーシアムせと」への積極的参加</p> <p>(4) 地域社会との共生</p> <p>【上記活動における報告】</p> <p>(1) 教職員への建学の精神の周知 キリスト教セミナーの開催をこれまでの9月から8月に変更し、出席者が増加した。</p> <p>(2) 新W3棟及びセンターコートの有効活用 W3棟及び西側センターコートの竣工に続き、ステップガーデンと薬草園が竣工しアメニティの充実が図れた。また、今まで整備状況の悪かった第2学生駐車場への経路にあった外部階段の改修及び外周防災道路の再舗装などを実施し、学生移動経路の安全対策を行った。</p> <p>(3) 「大学コンソーシアムせと」への積極的参加 「大学コンソーシアムせと」への積極的な参加を促し、新規の取組みが提出された。また、大学HPを通じて活動報告を発信した。</p> <p>(4) 地域社会との共生 5月6日に中部国際空港株式会社と産学連携に関する包括協定を締結し、6月3日には尾張旭市と包括的連携協力に関する協定を締結した。またKIDSセンターを安全に運営するため、スタッフ研修を通じて明らかになった問題点に関する対応策を検討した。</p> <p>「教職員への建学の精神の周知」については、セミナー開催時期変更により、出席者増加という成果が得られたことは、高く評価できる。「新W3棟及びセンターコートの有効活用」については、アメニティの充実だけでなく、学生の安全にも配慮しており、より良い学生生活を送ることができる環境整備を着実に進めている。「大学コンソーシアムせとへの積極的参加」と「地域社会との共生」は、大学が求められる社会貢献に関わるので、2016年度の成果を踏まえ、さらに活動を発展させていってほしい。</p> <p style="text-align: right;">(評価者：浅井邦昭)</p>					

2016年度 活 動 報 告

所 属	大学FD委員会	職 名	委員長	氏 名	奥 村 隆 平
<p>【2016年度活動目標】</p> <p>(1) 本学における教員像の明確化</p> <p>(2) 学生の主体的・能動的学びの実現に向けたFD交流集会の実施</p> <p>(3) 学内研究者に対する研究倫理教育受講方法の検討と実施</p> <p>【上記活動における報告】</p> <p>(1) 本学における教員像の明確化</p> <p style="padding-left: 20px;">大学基準協会により新たな『大学基準』及びその解説（2018年4月1日施行）が2016年9月に発表されたことを受け、これまでに話し合ってきた内容を軸に（新）点検・評価項目＜基準6教員・教員組織＞に対応した「大学として求める教員像及び教員組織の編制方針（案）」を検討した。引き続き内容を精査する。</p> <p>(2) 学生の主体的・能動的学びの実現に向けたFD交流集会の実施</p> <p style="padding-left: 20px;">6月29日合同教授会において「学習と学生生活アンケートの結果分析について」と題し、①高等教育政策の動向 ②データからみた学生生活に関する情報 を共有するFD交流集会を実施し、意見交換を行った。その後、「学習と学生生活アンケート結果からみる学科の弱みと解決法」を学科別協議会の共通テーマとし、1月の大学FD委員会において情報の共有をすることが出来た。</p> <p>(3) 学内研究者に対する研究倫理教育受講方法の検討と実施</p> <p style="padding-left: 20px;">10月26日「本学における文部科学省ガイドラインへの対応について」と題したFD交流集会を実施した。ここでは①研究倫理教育 ②コンプライアンス教育 の受講ガイドも紹介し、11月18日までに全教員が受講し、理解度アンケート・受講報告書の回収を行った（回収率：100%）。また大学院新生全員に同一のテキスト（受講ガイド付き）を配布し、理解度アンケート・受講報告書の回収を行った（回収率：100%）。今後、定期的に研究倫理教育を実施する予定である。</p>					
<p>(1) 教員像・教員組織の点検・評価によって明確となった課題から短期間で「大学として求める教員像及び教員組織の編制方針（案）」の策定に向けての活動を行ったことは評価される。次年度の方針（案）公表に向けての活動に期待する。</p> <p>(2) 「学習と学生生活アンケートの結果分析からみる学科の弱みと解決法」で浮き彫りとなった学生の主体的・能動的学びにおける問題点等を各教員が共有したことは意義があり評価される。今後、問題点等の解決方策の全学的・積極的な実施に期待する。</p> <p>(3) 大学院生を含めた学内の全研究者を対象とした研究倫理教育の継続的实施は、研究活動における不正行為の防止に有意義であり、大いに評価される。 （評価者：塚本喜久雄）</p>					

2016年度 活 動 報 告

所 属	大学教務委員会	職 名	委員長	氏 名	渡 辺 恭 子
<p>【2016年度活動目標】</p> <p>(1) 2017年度以降の教学スケジュールの検討</p> <p>(2) 2016年度からの高大接続連携授業「大学でのまなび」の実施に向けた環境整備</p> <p>(3) 英語副専攻設置に向けての学則並びにそれに伴う諸規程の変更</p> <p>(4) 2019年度以降の新共通教育カリキュラム策定に向けて検討開始</p> <p>(5) 単位の実質化に向けて授業外学習の量的、質的向上の検討</p> <p>【上記活動における報告】</p> <p>(1) 2017年度以降の教学スケジュールの検討</p> <p style="padding-left: 2em;">2016年度までの補講時限のあり方を大幅に変更することで、補講期間を削減した教学スケジュールを提案し、承認された。この変更により、祝日の授業日数を減らし、前期授業を早期に終了できるようになった。</p> <p>(2) 2016年度からの高大接続連携授業「大学でのまなび」の実施に向けた環境整備</p> <p style="padding-left: 2em;">アクティブラーニングをサポートするための学生を希望学科の授業に配置し、授業内での能動的学習をサポートする体制を整えた。また、授業外での学習を補助するために、ICTの利用について、利用方法、マナー等の冊子を授業前に配付することにより授業開始直後からICTを利用できる環境を整え、計画通りに授業を実施した。</p> <p>(3) 英語副専攻設置に向けての学則並びにそれに伴う諸規程の変更</p> <p style="padding-left: 2em;">英語副専攻を設置するための学則、運用をするための履修規程の変更を行った。詳細な運用方法については、履修要覧と別刷りの案内にて周知する方法とし、それらの準備を進めている。</p> <p>(4) 2019年度以降の新共通教育カリキュラム策定に向けて検討開始</p> <p style="padding-left: 2em;">10月の共通教育委員会から、2019年度以降の新共通教育カリキュラムの検討を開始した。現行カリキュラムにおける履修者数の問題点、各委員会や各センターからの要望を集約した。今後は、文部科学省からの要請等も考慮した新カリキュラムの策定を進める。</p> <p>(5) 単位の実質化に向けて授業外学習の量的、質的向上の検討</p> <p style="padding-left: 2em;">授業外学習の量的な向上については、他大学の取組等を調査したが、想定範囲内であり決め手に欠けるものであった。質的向上については、各学科から提出された意見や要望を集約し、それらの実態調査を終えた。現在は、実施可能な取り組みについての検討を行っている。学習効果の測定方法と授業外学習を推進するためのシラバス活用方法等について、今後とも検討を進める。</p>					

5項目の内、2項目（(1)・(2)）については、活動目標を達成できたものと評価できる。他の3項目（(3)～(5)）については、次年度にわたる活動であり、引き続き適切に取り組まれることを期待したい。

(1)については、補講期間を削減することで祝日授業日の減少、前期授業期間の早期修了がなされたが、導入後の検証が必要であり、必要であればさらに見直しを行うこと。

(2)については、アクティブラーニングのサポート体制、ICT 利用環境の整備が取り組まれ、計画どおりに実施されたことが評価できる。学生の学習意欲や態度、学力の向上に期待したい。

(3)については、2017年度入学生から導入されるものであり、初年度の適切な取り組みを期待したい。

(4)については、2019年度以降に導入されるものであるが、現行カリキュラムの課題解決と、文部科学省の示す大学教育の役割を勘案した新カリキュラムの策定を期待したい。

(5)については、次年度以降も継続する課題であるが、学生の学びの実質化にむけた有益な検討と早期の実施を期待したい。

（評価者：林 智樹）

2016年度 活 動 報 告

所 属	大学入試委員会	職 名	委員長	氏 名	奥村 隆平
<p>【2016 年度活動目標】</p> <p>(1) 適正な総入学者数の確保</p> <p>(2) 一般入試、大学入試センター試験利用入試等の方式の検討</p> <p>【上記活動における報告】</p> <p>(1) 適正な総入学者数の確保</p> <p style="padding-left: 20px;">適正な総入学者数の確保のために、2017 年度入試より一般公募制推薦入試で、取得した資格やボランティア活動を評価する「資格・面接型」入試を専願制入試として新設し、特徴ある入学者を確保できた。</p> <p>(2) 一般入試、大学入試センター試験利用入試等の方式の検討</p> <p style="padding-left: 20px;">2018 年度入学試験から、一般入試（前期）において複数日評価型を新設することを、2016 年 12 月 21 日開催の大学入試委員会において承認した。</p>					
<p>(1) 18 才人口の減少期に入り、適正な入学者数を確保する手段を探求しなければならない。学力以外のさまざまな努力を評価した選考方法として、「資格・面接型」入試の新設は、多様な学生を確保できるので評価できる。</p> <p>(2) 受験者にとって、合格のチャンスが増えることは、受験者数を確保するのに有効であると考えられるので、評価できる。受験者の増加を期待したい。これは、費用をほとんどかけないで効果が期待できる優れたアイデアである。</p> <p style="text-align: right;">(評価者：山川 仁)</p>					

2016年度 活 動 報 告

所 属	大学学生生活委員会	職 名	委員長	氏 名	鈴木正隆
<p>【2016年度活動目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> (1) 学生相談室体制の整備 (2) 『Kーカルテ』運用の充実 (3) 快適なキャンパス生活 (4) 就職活動学生の学内活動促進 (5) 就職試験対策の強化 (6) 教職員、学生組織と協同した学生生活の充実 <p>【上記活動における報告】</p> <ul style="list-style-type: none"> (1) 学生相談室体制の整備 <p>2015年度に引き続き年2回の学生相談室運営委員会を定例化させ、スクールカウンセラー、アドバイザー教員、外部医療機関間の連携を図ることで相談学生への迅速かつ組織的サポートを円滑に行うことができた。また、留学生(受け入れ及び送り出し)からの相談に対しても迅速に対応し、サポート体制を確認した。</p> (2) 『Kーカルテ』運用の充実 <p>K-PORTの追加機能として新Kーカルテの運用を開始し、現在順調に運用ができています。また、大学教務委員会と連携し、より充実した学生指導ができる追加機能(指導用成績表等)を検討し、2017年度から実施することとした。</p> (3) 快適なキャンパス生活 <p>学食利用に係るアンケート調査を実施し、結果をもとに座席、メニュー、価格等の改善策を実施した。また、学生が夜間に暗く危険だと感じる箇所について、現地調査、学生へのヒアリング調査を実施し、外灯の新設・再配備、雑木林の間伐等をすすめることとした。</p> (4) 就職活動学生の学内活動促進 <p>就職活動の成功には就職行事や就活ラウンジへの誘導が肝要と考え、教職員・内定者の協力を得ながら8施策を新設・強化した。しかし、就職状況の好転を受けて就活生たちの意識は上がり、就職ガイダンスへの参加率は就職希望者ベースで2015年度の58.2%から2016年度は56.3%と1.9%減少し、就活ラウンジの利用も同時期に比して減少していると判断される。引き続き対策を講じたい。</p> (5) 就職試験対策の強化 <p>次の3つのカテゴリーに注目した。【業界・企業研究】として「エントリー予定企業リストの提出」を含む3施策の新設及び1施策の強化、【筆記試験対策】として「数学到達度調査」を含む4施策の新設、【面接対策】として「面接想定質問集「面単」の創刊」を含む4施策の新設、計12施策を新設・強化する等、短期・集中化する就職活動に向けて対策を講じた。</p> (6) 教職員、学生組織と協同した学生生活の充実 <p>保健センターと学生会が連携し、婦人科医師による講演会を実施した。また、昨年度に引き続き教員と学生会が連携した企画を2件(名門ゴルフクラブでのレッスン等)、学生会企画を8件(和食のマナー講座等)実施した。</p> 					

(1) 学生相談室体制の整備

相談学生への迅速かつ組織的サポートを円滑に行った点に加え、留学生への迅速な相談対応や、サポート体制の構築は評価できる。

(2) 『K-カルテ』運用の充実

今後も適切な、セキュリティ管理をお願いしたい。

(3) 快適なキャンパス生活

女子学生が安全・快適にキャンパスライフを送れるよう、積極的に対応してきた点は、高く評価できる。

(4) 就職活動学生の学内活動促進

就職状況の好転においても通いたくなるような、さらなる行事やラウンジへの誘導策を期待したい。

(5) 就職試験対策の強化

様々な施策の新設・強化は高く評価できる。

(6) 教職員、学生組織と協同した学生生活の充実

教員と学生会が連携した企画は、多くの学生の参加が見込まれる点が評価できる。

(評価者：北折充隆)

2016年度 活 動 報 告

所 属	図書館委員会	職 名	委員長	氏 名	出 町 克 人
<p>【2016年度活動目標】</p> <p>(1) 図書館資料活用奨励活動の推進 (2) 図書館広報活動の強化 (3) 図書館の空間活用の推進</p> <p>【上記活動における報告】</p> <p>(1) 図書館資料活用奨励活動の推進</p> <p>図書館情報収集ガイダンスを38回開催し、学生532名が参加した。新規の試みとしては、ガイダンスを授業内のみ開催していたが、教員と調整を行い授業外でゼミ生のみ参加のガイダンスにも対応した。ガイダンス内容も可能な限りゼミの課題に沿った内容にカスタマイズし、学生がより興味を持ち、理解できるように工夫を凝らした。</p> <p>データベースの利用促進のため、外部講師によるデータベースガイダンスを4回開催し、学生214名が参加した。内容は、新聞データベースや心理系専門のデータベース、その他教員の要望も取り入れて多岐に渡るようにした。</p> <p>(2) 図書館広報活動の強化</p> <p>デジタル画像による図書館CMを作成し、学内の電子掲示モニターにて恒常的な上映を開始した。図書館の催事参加学生のアンケート等で、図書館CMを見て参加したとの回答もあり、学生への広報手段として効果があると認められた。その他の掲示による広報としては、ポスターを立体的にする、サインボードに手書きでイラスト入りの案内をする等、手作り感を強調し、視覚的に興味を引くように工夫をした。また、催事を行う際には、必ず図書館のホームページや大学のFacebook等で告知や報告を行い、図書館だより等の配布物にも積極的に掲載を行うなど、図書館の活動を多面的に学内外に向けて発信した。</p> <p>(3) 図書館の空間活用の推進</p> <p>2015年度の学生生活アンケートや図書館独自のアンケート、司書課程受講学生の図書館への提案など、利用者の意見を参考にして以下の空間活用を行った。</p> <p>自習用ノートPCの貸出開始に合わせて、閲覧室4階多目的室1をPCが使用可能な自習スペースとして開放した。また、閲覧室に荷物を置くための籠を増設した。学生からの要望が高かった旅行雑誌閲覧コーナーをラウンジに新設した。3階の文庫・新書コーナーには、学生の目に触れやすいように新刊展示用のブックスタンドを設置した。</p>					

- (1) につき、図書館資料の利活用に向けた各種ガイダンスを精力的に行い、利用者の要望も汲んで内容的改善に取り組んでいることは大いに評価できる。
- (2) につき、アンケート等による効果検証をふまえ、利用者への訴求力を高めつつ、学内外への積極的な情報発信が行われていることは図書館広報のあり方として妥当である。
- (3) につき、利用者の意見も取り入れながら、新たな企画とともに図書館の空間活用の推進が図られていることは意義深い。これら図書館の持続的発展を促す貴重な取り組みが一過的なものとならず、今後の継続と一層の進展が図られることを期待する。

(評価者：齋藤民徒)

2016年度 活 動 報 告

所 属	キリスト教センター 委員会	職 名	委員長	氏 名	小 室 尚 子
<p>【2016年度活動目標】</p> <p>(1) 礼拝の励行 (2) 建学の精神の確認 (3) 大学のキリスト教活動についての史料収集とまとめ</p> <p>【上記活動における報告】</p> <p>(1) 礼拝の励行</p> <p>1) 礼拝出席について</p> <p>2016年度、礼拝の励行において目標としたのは、上級生と教職員への礼拝出席の呼びかけ方を工夫することであった。上級生への呼びかけは教員方の協力が欠かせないが（宗教主事が授業で接するのは主に1年生であるため）、とくに卒業予定者への礼拝出席には協力をいただくことができ、昨年度の60名に比して、100名以上の出席者を得ることができた。</p> <p>教職員の礼拝出席者数は、昨年度比2割（延べ1000名）出席率を上げることができた。</p> <p>(2) 建学の精神の確認</p> <p>1) 新入生には、4月最初の授業で行われるオリエンテーションや授業で、『金城学院大学ものがたり』などの資料を活用してキリスト教大学としての意義を丁寧に説明した。目標とした上級生への確認喚起については依然課題である。教職員については、事務局側の提案により、新任職員オリエンテーションに「建学の精神を学ぶ」時間が新しく設けられ、今後続行されることを期待する。</p> <p>2) 校歌に親しむ</p> <p>昨年度の試みとして、礼拝の中で校歌を歌うなど、校歌に親しむ機会を増やし好評であったが、2016年度は、特別週間だけでなく、普段にも礼拝や集会で校歌を歌う希望が増えた。期待を上回る成果であった。</p> <p>(3) 大学のキリスト教活動についての史料収集とまとめ</p> <p>2016年度は、金城学院ハンドベルクワイアの歴史と活動を、原稿の段階までまとめることができた。今後は出版に向けての作業に入る。その他の活動については史料収集を引き続き行う。</p>					

- (1) 上級生の礼拝参加を促すため、教員からの上級生への呼びかけ、とくに卒業予定者の礼拝出席を促し、1.7倍の出席者を得たこと、また、教職員の礼拝出席者数が、昨年比2割も増加したことは、高く評価できる。
- (2) 1) 新入生に対し、折に触れキリスト教大学としての意義を丁寧に説明することは高く評価できる。上級生への確認喚起の方法については、引き続き検討されることを切望する。今年度から始まった新任職員への確認は、継続されることが望ましい。
- 2) 校歌に親しむ試みとして、校歌を歌う機会をさらに増やしていることは、高く評価できる。
- (3) 金城学院ハンドベルクワイアの歴史と活動を、原稿の段階まで進めたことは、高く評価できる。出版に向け期待したい。その他のキリスト教活動の史料収集を引き続き行ったことも大いに評価できる。

(評価者：荒深美和子)

2016年度 活 動 報 告

所 属	国際交流センター委員会	職 名	委員長	氏 名	日 詰 慎一郎
<p>【2016年度活動目標】</p> <p>(1) 国際交流センターの危機管理体制の整備</p> <p>(2) 国際交流センターが担当する新規共通教育科目（3科目）の導入と改善</p> <p>(3) 受入れ留学生への支援拡充と情報発信</p> <p>(4) 学生の多様なニーズを満たす留学プログラムの検討</p> <p>【上記活動における報告】</p> <p>(1) 国際交流センターの危機管理体制の整備</p> <p>1) 海外危機管理の専門家を招き、教職員を対象とした危機管理セミナーを11/24（木）と12/06（火）の2回実施した。近年、多発するテロ等に関する情報提供とともに、留学中の学生のメンタルヘルスケアに関する内容も新たにセミナーのプログラムに加えた。また同専門家による留学・研修参加予定の学生を対象とした合同危機管理オリエンテーションを前期7/13（水）と後期1/11（水）の2回、学生の留学・研修の出発時期に合わせて実施した。</p> <p>2) 留学生会館に居住する留学生26名とRA（レジデント・アシスタント）5名が参加し、防災意識を高めることを目的とした防災訓練を6/24（金）に実施した。災害時の安否確認の方法や避難指示の手順について確認をおこなった。</p> <p>(2) 国際交流センターが担当する共通教育科目（3科目）の改善</p> <p>1) 「Topics in Comparative Culture」「Topics in Contemporary Japan」「留学準備講座」について、2015年度の新規開講時は一部で履修者が少数に留まった。そのため2016年度は、留学説明会や国際交流イベント等の機会を通じ、学生に授業の魅力を積極的に紹介した。その結果、「Topics」の2科目については、2科目合わせて（2015年度）32名から（2016年度）64名に履修登録者を伸ばすことが出来た。一方で、「留学準備講座」については、（2015年度）58名から（2016年度）42名に履修登録者を減らす結果となり、今後の検討課題が残った。</p> <p>(3) 受入れ留学生への支援拡充と情報発信</p> <p>1) 「外国人留学生宿舎規程」の改善案にもとづき、より良い住環境を留学生に提供するため、宿舎の管理会社と協議をおこなった。そしてその結果を踏まえ、国際交流センター委員会にて居住者の実情やニーズに即した規程に改定するための検討をはじめた。しかし、規程の改定までは至らず、今後の課題として残った。</p> <p>(4) 学生の多様なニーズを満たす留学プログラムの検討</p>					

- 1) 2017 年度からスタートする「副専攻（実践ビジネス英語）プログラム」を確実に実施するため、2/13（月）～2/19（日）の期間、5名の学生をトライアルとして研修先のロイヤル・ローズ大学（カナダ）に派遣した。また新たな提携先となるサザン・クロス大学（オーストラリア）について、4名の学生を選抜し、2月から約1年間の留学予定で派遣した。
- 2) (カナダ) ロイヤル・ローズ大学と「副専攻（実践ビジネス英語）プログラム」に加え、2017年度の夏季に実施予定の新たな語学研修のプログラム開発を行った。また3月に台湾・高雄で開催された国際教育交流フェア(APAIE)に職員1名を派遣し、新たな留学プログラムや提携先確保のための情報収集をおこなった。

以上

(1) 国際交流センターの危機管理体制の整備

危機管理に対する意識が高まるよう、学生、教職員の啓発に努め、また、留学生会館では防災訓練を実施する等、国内、海外の留学生の安全確保に努めている点が評価できる。安全対策への意識を高め、維持する活動を今後も続けて欲しい。

(2) 国際交流センターが担当する共通教育科目（3科目）の改善

履修者増対策が功を奏し、「Topics」の2科目で履修登録者が倍増したことは評価できる。年度間の多少の増減は止むを得ない。引き続き周知方法の検討等が進められ、成果が上がることに期待する。

(3) 受入れ留学生への支援拡充と情報発信

外国人留学生宿舎規定の改定が慎重に検討されていることが評価できる。この作業が留学生支援のさらなる充実に繋がることを期待する。

(4) 学生の多様なニーズを満たす留学プログラムの検討

新しいプログラムの開発が積極的に進められ、留学希望者の多様なニーズに応え、留学をより充実したものにしようと努力していることが大いに評価できる。留学生支援のさらなる充実に期待する。

(評価者： 大原直樹)

2016年度 活 動 報 告

所 属	マルチメディア センター委員会	職 名	委員長	氏 名	長谷川 元 洋
<p>【2016 年度活動目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> (1) コンピュータ教室での学生サポートの充実 (2) 全新入生を対象にしたマルチメディアセンター講習会の実施 (3) 2014 年度に策定した manaba の利用ルールに基づいた運用 (4) SA、TA 等を manaba のコースに登録できるよう manaba への機能追加の実施 (5) manaba と K ドライブ、ハンダウトを利用した遠隔授業を実施するための教員向け説明資料の作成 (6) 私立大学情報教育協会（以下、私情協と表す）の研究大会等の情報の共有の継続 <p>【上記活動における報告】</p> <ul style="list-style-type: none"> (1) コンピュータ教室での学生サポートの充実 <p style="margin-left: 20px;">SA、TA による学生サポートを充実させられるよう、SA、TA の学生・院生を指導した。 また、2015 年度は SA が 29 名であったが、2016 年度は TA が 1 名、SA は 30 名の合計 31 名に増員できた。</p> (2) 全新入生を対象にしたマルチメディアセンター講習会の実施 <p style="margin-left: 20px;">2015 年度に引き続き、全新入生を対象にしたマルチメディア講習会を実施した。2015 年度に引き続き、平日開催となったこともあり、出席率は 98.6%であった。欠席した学生も e ラーニングで講習を受講できるようにし、学生生活の円滑なスタートのための学習環境を整えた。</p> (3) 2014 年度に策定した manaba の利用ルールに基づいた運用 <p style="margin-left: 20px;">2014 年度に策定した manaba の利用ルールに基づき、複数の教員が連携して指導する科目用のコース、複数年度にわたって学生を指導するためのコース、資格取得を支援するためのコース等を運用した。</p> (4) SA、TA 等を manaba のコースに登録できるよう manaba への機能追加の実施 <p style="margin-left: 20px;">SA、TA 等を manaba のコースに登録できるよう manaba への機能追加を実施し、授業サポート体制を行いやすくするなど、柔軟な利用を可能にした。</p> (5) manaba と K ドライブ、ハンダウトを利用した遠隔授業を実施するための教員向け説明資料の作成 <p style="margin-left: 20px;">大学教務委員会が定める条件を満たす遠隔授業を実施するために必要な準備や設定の方法を解説した資料を作成した。また、manaba にも説明用のコースを設置した。</p> (6) 私情協の研究大会等の情報の共有の継続 <p style="margin-left: 20px;">機関加盟している私情協が提供しているオンデマンド配信サービスを契約し、国の施策や全国その他大学の教育実践への ICT 活用等の最新の情報を学内で共有できるようにした。</p> 					

- (1) につき、SA、TA の増員で学生サポートの充実が図られたことは評価できる。
- (2) につき、講習会で高い出席率を維持し、欠席した学生にも e ラーニングで受講可能にしたことは重要で、今後も継続が望まれる。
- (3) では、複数コースの運用は多様なニーズに対応した点で評価できる。
- (4) は、授業サポート体制の充実に必要な措置である。
- (5) につき、説明資料の作成と manaba での説明用コースの設置は、今後の授業展開で活用が期待される。
- (6) では、学外の最新情報を共有できるようにした点は評価できる。

(評価者：河野裕康)

2016年度 活 動 報 告

所 属	言語センター委員会	職 名	委員長	氏 名	水 野 真木子
<p>【2016年度活動目標】</p> <p>(1) リメディアル教育の効果的運用とその検証</p> <p>(2) 実践的英語教育の活性化と TOEIC 受験の促進</p> <p>(3) 学内留学の活性化</p> <p>(4) 2019年度カリキュラム変更に向けての検討</p> <p>【上記活動における報告】</p> <p>(1) リメディアル教育の効果的運用とその検証</p> <p style="padding-left: 2em;">教員からの該当学生への直接の働きかけを含め、学生への周知、激励が功を奏し、一部の学生はALC Netacademy2のプログラムを最後までやり遂げ、CASECのスコアが100点から150点上昇するという成果を挙げた。</p> <p style="padding-left: 2em;">さらに多くの学生のモチベーションを高めるため、今後も引き続き、同様の努力をしていく。</p> <p>(2) 実践的英語教育の活性化と TOEIC 受験の促進</p> <p style="padding-left: 2em;">TOEIC 受験の促進という点においては、受験者数、スコア共に横ばい状態が続いている。ただ、10月27日に開催した千田潤一氏による『使える英語』の効率的な習得方法と TOEIC のスコアの伸ばし方についての講演会は盛況で、聴講した学生たちの学習へのモチベーションが高まったことはアンケート結果からも明らかである。</p> <p style="padding-left: 2em;">TOEIC 科目である「英語コミュニケーションF・G」が半期で履修できるようになったが、3つの授業のうち金曜4限の授業の参加者が非常に少なく、授業の配置についての再検討が必要である。</p> <p style="padding-left: 2em;">今後も、就職活動における TOEIC スコア有用性について、より積極的に学生にアピールするための工夫を行い、自主学習への意欲向上につなげていく。</p> <p>(3) 学内留学の活性化</p> <p style="padding-left: 2em;">昼休みに留学生と外国語を使って会話する「学内留学」を安定的に運営するため、言語ごとに曜日を定めるとともに、参加者カードを作成し、連続参加者へのプレゼントを用意した。また、その効果を検証したところ、確実に不利な曜日のあること、参加者はカードへの印は喜ぶが、必ずしもプレゼント目当てではないことなどが分かった。</p> <p>(4) 2019年度カリキュラム変更に向けての検討</p> <p style="padding-left: 2em;">言語センターで運営する科目は、英語教育科目、外国語教育科目ともに非常に数が多く、簡単に変更はできない。また、テキスト選択を含む授業運営については、適宜、改良を行ってきており、現在の形で完成度が高いものとなっている。したがって、言語センターとしては、現在の形を維持しつつ、各レベルの授業内容のさらなる改善を目指す。</p>					

- (1)については、リメディアル教育という観点から語学教育を実践している点は高く評価できる。
- (2)については、TOEIC受験の促進を図るために、著名な教育者による講演会を実施したことは評価できる。今後は、TOEICの意義の周知及び有効な時間割の設定が期待される。
- (3)の留学生に協力を依頼して行われる「学内留学」は、語学教育及び異文化理解という点で大変有意義なものとして高く評価できる。
- (4)については、現行カリキュラムの維持・発展のために、さらなる改善が期待される。

(評価者：森田順也)

2016年度 活 動 報 告

所 属	文学部 自己評価委員会	職 名	委員長	氏 名	高野 祐二
<p>【2016年度活動目標】</p> <p>(1) 受験生確保のための方策の検討 (2) 高校生を対象にした文学部イベント企画の準備 (3) FD活動の推進</p> <p>【上記活動における報告】</p> <p>(1) 受験生確保のための方策の検討 一般公募制推薦入試（資格・面接型）の実施の可能性について、文学部入試委員会に検討を依頼した。導入に前向きな学科もあり、2017年度も引き続き検討することとした。</p> <p>(2) 高校生を対象にした文学部イベント企画の準備 一部の高校生を対象に行うビブリオバトルを中心にしたパイロット企画を検討する予定であったが、諸事情を考慮した結果、ビブリオバトルではなく他の形のイベントを改めて検討するという結論になった。</p> <p>(3) FD活動の推進</p> <p>1) 教育FD 文学部FD講演会において鳥飼玖美子立教大学名誉教授に講演をお願いした。「＜グローバル人材育成＞政策と大学教育」というタイトルでお話いただき、文学部における教育について考える有益な機会となった。</p> <p>2) 研究FD 文学部研究交流会において朴珣英准教授が研究発表（フレデリック・ダグラスの自伝における語りの自由）を行い、意見交換を行った。</p>					
<p>2016年度活動目標（1）について：外部資格を評価対象に組み入れる入試方式の検討を進めていることは評価できる。センター試験廃止後の入試制度にもいずれ反映されるであろうことを期待する。（2）について：一部の高校生を対象としたビブリオバトルを中心にしたパイロット企画について検討した結果、イベントのあり方を根本から再考することとなったが、次年度以降の再検討に期待したい。（3）について：教育FD活動・研究FD活動ともに、2016年度の活動目標を計画どおりに達成しており、高く評価できる。</p> <p style="text-align: right;">（評価者：古寺浩）</p>					

2016年度 活 動 報 告

所 属	生活環境学部 自己評価委員会	職 名	委員長	氏 名	古寺 浩
<p>【2016年度活動目標】</p> <p>(1) 初年次導入教育の取り組み推進</p> <p>(2) 学部内就職支援の強化</p> <p>(3) 学部内情報共有サイトの充実</p> <p>(4) 同窓会との連携強化</p> <p>(5) W3棟の有効活用</p> <p>【上記活動における報告】</p> <p>(1) 初年次導入教育の取り組み推進 学科別FD協議会において、入学前プログラムと1年次開講演習科目を対象に初年次導入教育の成果と課題、2017年度に向けた方策などを検討した。また、その結果を生活環境学部全体で共有するために、2016年度生活環境学部FD研修会を開催した。 ■ 2月15日（水）2016年度生活環境学部FD研修会「初年次教育の成果報告会」</p> <p>(2) 学部内就職支援の強化 学科ごとに企画・運営しているキャリア懇談会（3年生を対象とした卒業生・内定在学生による就職やキャリアに関する説明会）を関心あるすべての学生が参加できるようにした。</p> <p>(3) 学部内情報共有サイトの充実 Googleカレンダーを埋め込んだ「生活環境学部教授会」と題したGoogleサイトで、教授会やその他の会議、イベントの日程を共有した。また、生活環境学部活動目標、各種申請・提出様式、リンク集を掲載し、情報の共有と諸業務の効率化に役立てた。</p> <p>(4) 同窓会との連携強化 同窓会「野のはな」との連携を強化するため、以下のようなイベントを実施した。 ■ 6月17日（金）大学見学会 リリーノースでの昼食懇談会＋大学施設見学 ■ 3月1日（水）同窓会執行部と4年生同窓会委員合同昼食懇談会＋ミーティング</p> <p>(5) W3棟の有効活用 環境整備委員会と総務委員会（学部長・3学科主任、3委員長）が中心となって課題などをチェックし、財務部管財課に依頼しながら異臭対策、換気対策、湿気対策、掲示板設置などを実施した。また、2017年6月に実施予定の1年点検に向けた、改善課題の洗い出し作業をおこなった。</p>					

(1)と(2)について:学生支援の一環として、初年次導入教育と就職に関する説明会を学部全体として強化していこうとする活動を行ったことは高く評価できる。(3)～(5)について:学部内情報共有サイトを充実し情報の共有と諸業務の効率化を図ったこと、同窓会との連携強化のためのイベントを開催したこと、およびW3棟の有効活用のために行った活動は、いずれも独創的な取り組みであり、十分に評価できる。

(評価者:高野祐二)

2016年度 活 動 報 告

所 属	国際情報学部 自己評価委員会	職 名	委員長	氏 名	大 橋 陽
<p>【2016 年度活動目標】</p> <p>(1) 新カリキュラムの確実な実施に向けた準備 (2) 2コースの特徴を活かした教育・研究活動の推進 (3) K I T (Kinjo International Training) の運営の見直し</p> <p>【上記活動における報告】</p> <p>(1) 新カリキュラムの確実な実施に向けた準備 2017 年度入学生より適用されるカリキュラムについて、学内手続きを完了させた。より充実した教育を提供するため、複数の新科目について必要な準備を進めるとともに、2016 年度以前の入学生に対し、カリキュラムの移行期に不利益が生じないよう措置を講じた。</p> <p>(2) 2コースの特徴を活かした教育・研究活動の推進 各コースの特徴を活かした教育・研究活動を推進する一環として、幅広い専門分野から成る本学部の特徴を、各コースの魅力が高めるために活用する方策を模索した。教育活動においては、企業など学外と連携した授業を増加させた。研究活動においても、著書の出版や、「被災地復興支援地域メディアに関する情報文化学による研究」がゼミとして第 24 回情報文化学会賞を受賞したように、各教員が専門性を活かした活躍をした。</p> <p>(3) K I T (Kinjo International Training) の運営の見直し K I T 運営体制を見直した。2 年次以上を対象に従来よりも長期にわたるプログラムを実施した。教員の引率負担の見直しの一環として、各コースに国内対応を行う「カウンターパート教員」を継続的に配置した。また、危機管理体制の見直し、海外の不測の事態への対応力を向上させた。</p>					
<p>(1) について、2017 年度より実施される新カリキュラムの準備が順調に進んでいることは評価できる。(2) について、各コースの魅力が高める方策が検討され、企業と連携した授業の増加や教員の出版活動の活性化など、成果が着実に上がっていることは大いに評価できる。(3) K I T 運営体制の見直しについて、2 年以上を対象とした長期プログラムの導入や教員の引率負担軽減の工夫、危機管理体制の見直しは非常に評価できる。安全対策のさらなる向上を期待する。</p> <p style="text-align: right;">(評価者：宗方比佐子)</p>					

2016年度 活 動 報 告

所 属	人間科学部 自己評価委員会	職 名	委員長	氏 名	中 野 修 身
<p>【2016年度活動目標】</p> <p>(1) 学部・各学科における専門教育の充実</p> <p>(2) 学部 FD 活動の推進</p> <p>(3) 学部の専門性を生かした社会貢献についての検討</p> <p>(4) 志願者増、定員確保に向けた新しい入試方法の検討</p> <p>【上記活動における報告】</p> <p>(1) 学部・各学科における専門教育の充実</p> <p>現代子ども学科においては、既存の主要4資格に加えて、別種の新しい資格取得の可能性を検討し始めた。また、小学校英語教育の更なる充実のためのカリキュラム改定も検討することになった。多元心理学科では、公認心理師の資格新設に対応するためのカリキュラム改定を準備している最中である。コミュニティ福祉学科においては、専門教育の充実を図り、ソーシャルウーマン養成プログラムを一つの柱とする大幅なカリキュラム改定の骨格を作成した。</p> <p>(2) 学部 FD 活動の推進</p> <p>上記(1)の活動目標に関わって、学部内他学科のカリキュラム、専門教育の内容を、学部構成員全員が共有することを目的に、学部FD研修会を開催し、多元心理学科・コミュニティ福祉学科による新しいカリキュラムの説明があり、質疑応答がなされた。</p> <p>(3) 学部の専門性を生かした社会貢献についての検討</p> <p>KIDSセンターは、様々なプログラムで順調に地域貢献を果たしているが、2016年度に大学が尾張旭市と包括連携協力に関する協定を締結したことを受け、人間科学部は子ども、子育て支援に関する分野をはじめとするいくつかの領域で連携、協力していく準備を開始した。</p> <p>(4) 志願者増、定員確保に向けた新しい入試方法の検討</p> <p>現代子ども学科においては、推薦入試制度に関わって、入学者数の安定的な確保のための検討を行った。コミュニティ福祉学科では、新しい入試制度として「資格・面接型入試」を導入した。また同科では、より効果的なオープンキャンパス用パンフレットの作成等の対応も行った。</p>					

- (1) 人間科学部の各学科において、専門教育を充実させるためにカリキュラム改訂に手がけている点について、今後の成果が期待できる。また、現代子ども学科において、新たな資格取得の可能性の検討についても高く評価できる。
- (2) 上記(1)の活動目標達成のために、カリキュラム・専門教育充実のために、学部FD研修会を行っていることについても評価できる。
- (3) KIDSセンターへのサポートによる社会貢献や地域連携は高く評価できる。
- (4) 志願者増、定員確保に向けた取り組みについても、その成果が期待される。

(評価者：日野知証)

2016年度 活 動 報 告

所 属	薬学部 自己評価委員会	職 名	委員長	氏 名	日 野 知 証
<p>【2016年度活動目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> (1) 薬剤師国家試験及び薬学共用試験への対応 (2) 薬学教育評価機構による薬学教育評価への準備 (3) 自立学習できる医療人を目指した教育の実践 (4) 実務実習の円滑な実施の維持 (5) 志願者増対策と入学定員確保 (6) 地域等への社会的貢献 (7) 学生の海外研修の開始に対する準備 <p>【上記活動における報告】</p> <ul style="list-style-type: none"> (1) 薬剤師国家試験及び薬学共用試験への対応 <p style="margin-left: 20px;">第100回・101回国家試験の結果を踏まえ、他大学の国試対策情報等を参考に、第102回国家試験に向け、自立学習を目指した指導を行った。4年次生の薬学共用試験についても、自立学習ができるよう指導した。その結果、2016年度の薬学共用試験では、再試験を実施する以前の CBT 本試験の段階において、金城学院大学薬学部としては最高の合格率(96.2%)、最少不合格者数(7名)となった。また、OSCE では金城学院大学薬学部として初めて本試験で全員(185名)が合格した。</p> <p style="margin-left: 20px;">1～3年次生に対しても薬学共用試験及び国試に向けて自立学習ができるよう指導した。</p> (2) 薬学教育評価機構による薬学教育評価への準備 <p style="margin-left: 20px;">2018年度に薬学教育評価機構による薬学教育評価を受審することが確定し、6月の私立薬科大学協会通常総会において周知された。それを受けて、「第三者評価をうけるための委員会」を設置した。また、必要書類等の保管に努めるとともに、2018年度本評価対象大学説明会に教員1名および事務職員1名を派遣した(1月24日)。</p> (3) 自立学習できる医療人を目指した教育の実践 <p style="margin-left: 20px;">自分で考え、判断する力が身につくよう、低学年から指導を徹底し、薬学基礎知識の定着を図った。具体的には薬学セミナー(1)～(6)、薬学PBL(1)、(2)及びCBL(1)～(3)における指導の強化、春期及び夏期の休暇時における課題の適用等である。</p> (4) 実務実習の円滑な実施の維持 <p style="margin-left: 20px;">今後の東海地区実務実習のあり方についての検討会(9月15日)および2016年度大学薬学部・県薬剤師会連携懇談会(9月16日)に学部長および実務実習担当教員が出席して、実務実習の円滑な実施に向けて愛知県内の4大学の薬学部と愛知県薬剤師会関係職員との懇談を行った。</p> <p style="margin-left: 20px;">愛知県薬剤師会、病院薬剤師会等の関係諸機関および県下4大学薬学部との連携で、実務実習は滞りなく進められた。</p> (5) 志願者増対策と入学定員確保 <p style="margin-left: 20px;">定員確保を目指し、以下の活動をした。高校訪問やオープンキャンパスでは、本学の特色、魅力を伝え、本学薬学部への関心を深めることができるような情報提供をした。また、薬学部見学、出前授業等の要請に応えた。</p> (6) 地域等への社会的貢献 <p style="margin-left: 20px;">例年通り、日本薬学会東海支部講演会を金城学院大学で5回開催した。第60回認定実務実習指導薬剤師養成ワークショップを1月8、9日に開催した。また、教員を実務実習指導薬剤師アドバンスワークショップに講師として派遣した。その他、愛知県薬剤師会主催の学習会や守山区内の薬剤師研修行事にも参加して、地域に貢献することができた。</p> (7) 学生の海外研修の開始に対する準備 <p style="margin-left: 20px;">薬学部学生を米国内の大学あるいは医療施設で研修させるための仕組みの開始に向けた準備の一環として、副専攻海外研修トライアルに協力した。</p> 					

- (1) 自立学習を目指した指導の結果、4年次生が2016年度薬学共用試験において過去最高の合格率を達成したことは、高く評価できる。
- (2) 薬学教育評価機構による教育評価にむけて委員会を設置し、説明会への参加など周到な準備がなされている点が評価できる。
- (3) 高校訪問や薬学部見学、出前授業の積極的な実施は、大変意義があり、志願者増が期待できる。その他の取り組みについても、継続的な努力が評価できる。

(評価者：藤森清)

2016年度 活 動 報 告

所 属	文学研究科 自己評価委員会	職 名	委員長	氏 名	藤森 清
<p>【2016 年度活動目標】</p> <p>(1) 教育研究交流の促進 (2) 学生の学外学会発表の促進 (3) 学生の意識調査の実施 (4) 定員確保にむけたカリキュラム改訂の検討</p> <p>【上記活動における報告】</p> <p>(1) 教育研究交流の促進 2016年11月22日に美術史家で元メトロポリタン美術館主任研究員の渡辺雅子氏を招き、講演「世界の中の日本美術」を開催した。これは大学院文学研究科講演会第5回にあたり、学外からの参加者も含め約80名の参加者を得た。講演では、日本美術の特質が東アジアや世界美術の文脈において論じられた。美術史研究そのものの国際的状況や学際的動向がメトロポリタン勤務という体験に基づいて紹介され、学生・教員の研究の視野の拡大に役立った。</p> <p>(2) 学生の学外学会発表の促進 2013年度に制定された金城学院大学大学院学生学会発表旅費交通費助成の利用者は、3専攻各1名の3名であった。2015年度の1名から増加した。制度の周知徹底、学会発表の数値目標設定、教員の指導強化などの成果が現れたと思われる。</p> <p>(3) 学生の意識調査の実施 2016年度は、2年に一度の学生意識調査の年に当たり、11月に実施した。カリキュラム、授業評価、指導体制等に関する質問事項の評価は、おおむね良好であった。結果を授業方法、指導体制の改善に生かすべくFD委員会で協議した。</p> <p>(4) 定員確保にむけたカリキュラム改訂の検討 在学学部生向け説明会などを通して受験生確保に努力した結果、2017年度入学生は、2016年度を大きく上回った。前期課程については、3専攻ともほぼ入学定員を満たすことができた。専攻主任会議やFD委員会などを通しての検討や、留学生むけにパンフレット配布範囲を広げたことなどの成果と思われる。2017年度以降も、カリキュラム改訂を含めた更なる対策案作りが必要であることが確認された。</p>					

- (1) 教育研究交流の促進として、学外者による講演会実施を継続し5回目を迎えたことは高く評価できるものであり、優れた講演者により学生・教員の視野が広がり、教育・研究に還元されるものと考えられる。
- (2) 教員の取組が成果として現れ、学生の学会発表旅費交通助成の利用者が2015年度の1名から2016年度には各専攻1名ずつの3名に増えたという結果を得たことは素晴らしい。
- (3) 学生の意識調査を実施し、主要質問事項の回答が良好であり、かつ、指導改善のためのFD活動としてしっかりチェックされていることは評価できる。
- (4) 定員確保にむけたカリキュラム改訂が奏功し、3専攻がほぼ入学定員を満たす結果につながったことは高く評価でき、さらに魅力ある研究科となるような継続的取組が大いに期待される。

(評価者：大橋陽)

2016年度 活 動 報 告

所 属	人間生活学研究科 自己評価委員会	職 名	委員長	氏 名	宗方 比佐子
<p>【2016年度活動目標】</p> <p>(1) 長期履修制度の検証 (2) FD 活動の推進</p> <p>【上記活動における報告】</p> <p>(1) 長期履修制度の検証</p> <p>大学院長期履修制度は 2008 年より施行され、人間生活学研究科では 2016 年度までに 12 名（前期課程 7 名、後期課程 5 名）が利用した。制度利用者の実態を検証したところ、この制度は社会人大学院生の学業生活を大いに支援してきたと判断される一方、制度の意図に反して一部で計画的とはいえない利用がみられたことから、修業年限の延長を残りの修業年限の 2 倍までに制限するよう規程を変更した。</p> <p>(2) FD 活動の推進</p> <p>2017 年 3 月 1 日（水）開催の大学院 FD 研修会において、テーマを「人間生活学研究科における研究指導の在り方」とし、川瀬正裕教授より人間発達学専攻・臨床心理学分野での研究指導の現況について報告していただき、より良い研究指導の姿勢や方法に関して討論した。また、公認心理師の国家資格化に伴い、人間生活学研究科・人間発達学専攻では近い将来、受験資格に対応した体制を整える必要が生じるため、このことに関連した情報も川瀬教授より提供していただき、研究科内で情報を共有した。</p>					
<p>(1) 学生の長期履修は、大学院においてはとくに必要不可欠の制度であり、その現状の検証と検証に基づく規程の改定は評価できる。</p> <p>(2) FD 研修会を開催し、大学院における研究指導のあり方に関して協議したこと、また、在籍者が恒常的に一定数確保されている人間発達学専攻臨床心理学分野の今後の方向について、構成員全体で情報を共有したことは大いに評価することができる。</p> <p style="text-align: right;">（評価者：中野修身）</p>					